



体育研究所「基盤研究」始動!



石手 靖

体育研究所 所長

所長挨拶

この度、平成25年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究レポートを刊行することができました。ひとえに関係者の皆様方のご尽力の賜物と深く御礼申し上げます。体育研究所では、2011年12月に「慶應義塾の体育・スポーツを問い直す」と題し、設立50周年記念シンポジウムを開催しました。そこでは、グローバル化社会(時代)を生き抜くことのできる人材を世に輩出するために、大学の体育教育が担う課題として、「大学における競技スポーツ」「スポーツにおける大学と地域の連携」「大学体育教員の使命」について議論されました。その結果、我々はそれらの課題解決に向けて研究成果を上げる必要性を確認しました。これを受け、2012年に所員が総力を結集して、これらの問題解決に取り組むために基盤研究を立ち上げました。まだまだ具体的な成果を示すには至りませんが現状をご報告させていただきます。

さて、新年1月27日に日吉キャンパス協生館日吉プールにおいて、国連ユースリーダーシップキャンプ東京大会(主催:国連・開発と平和のためのスポーツ事務局(UNOSDP))の水泳プログラムが急遽実施されました。当初予定していた会場の不具合による緊急的な対応でしたが、幸いにもアジア各国から選出された18歳から25歳の約30名の若者が、著名な指導者の下、様々な「水に親しむ」プログラムに取り組む姿勢を拝見することができました。このキャンプの目的の一つは、途上国の開発支援と平和の促進のため、スポーツ活動を通じて若者のリーダーを育成することにあると主催者は言います。仲間への尊重やチームワークなど人間教育としてスポーツが大いに生かされている場面でした。

言うまでもなく大学は人格形成の場であります。慶應義塾も社会の先導者には健康な身体と精神が必要であり、学問のみならずスポーツを実践し、高い人格を養うことの重要性を深く認識しています。体育研究所は塾生にスポーツ教育を通じて幅広い人格形成につながる機会を与え、未来を切り拓くための行動力を育てるよう、今後も努力を重ねてまいりますので、ご理解とご協力を宜しくお願い申し上げます。



国連ユースリーダーシップキャンプ東京大会の様子 「体育・スポーツが担う社会的役割は大きい」

Photo by Yukihito Taguchi

基盤研究 座長より

近藤明彦 体育研究所基盤研究 座長

体育研究所はこのたび「基盤研究」という新たに継続的な研究プロジェクトを開始し、平成 25 年度の成果をまとめた「体育研究所、基盤研究レポート」を発行することとなりました。

運動・スポーツ・体育科学の研究課題は広範な領域に広がっています。体育研究所の所員はそれぞれの専門領域を中心に、運動・スポーツ・体育という事象を対象とし、それぞれの専門である人文・社会・自然という異なった学問分野の視点から研究を行い数多くの成果を公表してきました。また体育研究所としてもプロジェクトを実施してきましたがこれらは周年事業として行われる期間限定的なものでした。平成 24 年には体育研究所設立 50 周年記念シンポジウムが開催され「大学に於ける体育」はどうあるべきか、「体育研究所は今後どのような活動をすべきか」という議論が行われました。このシンポジウムの議論がもとになり、体育研究所として明確なテーマをもって継続的な研究を展開する必要性がその後確認され、「基盤研究」という位置づけで継続的なプロジェクトを展開することとなりました。

教育研究機関としての体育研究所では授業として体育課目(実技・講義)を展開していますが、この授業の質の維持・向上が課題となっています。また授業以外の各種サービスプログラムをどのように展開するかも課題となっています。そして一般塾生はもとより塾内組織である体育会をはじめとする各種スポーツ競技団体への貢献をどのように進めていくべきか、また義塾外の諸組織とどのように連携・貢献していくかという課題もあります。これらの課題に対して「基盤研究」では「体育」という視座を中心に研究を展開しようと三つのテーマを設定しました。それは、① FD 実践としての体育授業プログラムの在り方、② 学生スポーツの行動と大学におけるスポーツ、③ 大学体育の教育理念とカリキュラム、です。

「基盤研究」を「体育」という視座から展開するということは、体育研究所が実施している授業やその他のサービスプログラムについて教育学的意義や効果の検討を進めることを意味しています。このことは大学に於ける体育課目の必要・不要論に対しても明確な答えを提供することが期待されています。

基盤研究 コアテーマ①

FD 実践としての体育授業プログラムの在り方 (その 1)

「自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発」

班長：村松 憲

班員：村山光義・板垣悦子・野口和行 (以上体育研究所)・東海林祐子 (慶應義塾大学総合政策学部)

体育実技の実践は学生の人的成長に大いに寄与する

本グループでは、自己効力感(ある課題を達成するために必要な行動をどの程度うまく実施できるかの確信、Bandura1977)及び社会的スキル(円滑な人間関係を形成・維持するために必要な行動、菊地 1988)の向上に体育実技がどのように貢献するのかという体育研究所が取り組ん

できたこれまでの研究(加藤ほか 2011、村山ほか 2012、野口ほか 2012)を更にすすめ、どのようなプログラムが有効なのかという観点を持ち研究を進めている。本稿では本グループのこれまでの研究を簡潔に紹介するとともに、現在行っている取組みについて紹介する。

野口ほか(2012)は体育実技の中に社会的スキルの向上を意図しコミュニケーションの促進を図るプログラムを取り入れることにより、

- プログラムを取り入れた群は社会的スキルのみならず、自己効力感も向上した。社会的スキルの向上を意図した介入が、社会的スキルと高い相関のある自己効力感にもプラスに作用したと考えられる。
- 1回目が低得点の者ほど得点増加が大きかったことから、社会的スキル向上のプログラムは社会的スキルの低いものに効果的であると考えられると報告した。図1は、プログラムの有無による1、2回目の比較(社会的スキルの点数)である。図2は1回目の社会的スキル得点が低いものほど2回目に増加した点数が多いことを示す図である。また村山ほか(2012)は社会的スキルと自己効力感テストを実施した結果、経年による経験の影響、体育実技の実践およびその繰り返しのよってこれらの点数が向上する可能性を示唆している。なお本グループでは、これまで行ってきた上記研究結果が、合宿形式でのシーズンスポーツにおいてもあてはまるのかどうか、既にアンケートを実施して分析をはじめている。今のところ合宿形式授業は、社会的スキルと自己効力感に対して異なる効果を示す傾向がみられているが、詳細については今後明らかにする予定である。

自己効力感・社会的スキルに加え、本グループが取り組んでいる指標にライフスキルがある。東海林ほか(2012)は単元前の大学生のライフスキルの獲得レベルに着目し、体育授業におけるライフスキル獲得への影響と違いを検証することを目的とした研究を行っており、本グループでも同様の指標を用いて体育研究所が実施する体育実技においても、体育実技がライフスキル獲得に寄与するのかどうか、すでにアンケート調査を実施し、現在検討を始めている。

文献

- 1) 加藤大仁, 村山光義, 須田芳正, 村松 憲 (2011) 学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的検討——一般性自己効力感, 社会的スキルの変化に着目して——. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 50(1), 9-22
- 2) 野口和行, 須田芳正, 村松 憲, 村山光義, 加藤大仁 (2013) 学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 52(1), 11-20.
- 3) 村山光義, 加藤大仁, 須田芳正, 村松 憲, 野口和行 (2013) 体育実技履修学生の社会的スキルおよび自己効力感の水準に関する基礎的検討. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 52(1), 21-31.
- 4) 東海林祐子, 永野智久, 加藤貴昭, 佐々木三男, 島本好平 (2012) 大学体育授業がライフスキルの獲得に与える影響: 単元前の学生のスキルレベルに着目して. Keio SFC journal, 12(2), 89-108.

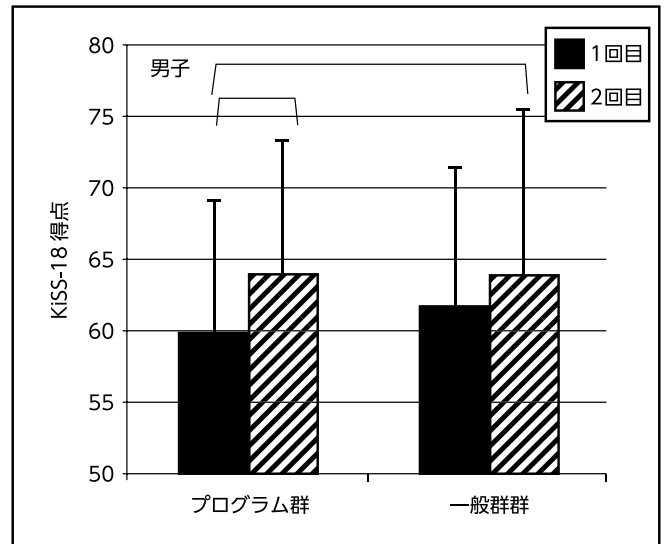


図1 社会的スキル (KISS-18) の1回目と2回目の比較およびプログラム有りと無しとの比較 (有意差検定: $P < 0.01$) (野口ら, 2013 文献リスト2)より

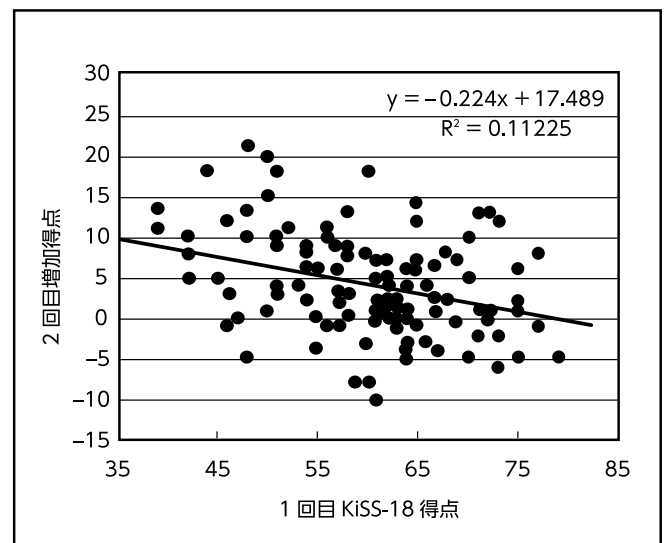


図2 社会的スキル (KISS-18) の1回目と増加得点との関係 (野口ら, 2013 文献リスト2)より

FD 実践としての体育授業プログラムの在り方 (その 2)

「大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的な動機づけに貢献するか? ——大学体育における動機づけ雰囲気の研究——」

班長：山内 賢

班員：佐々木玲子・加藤大仁・永田直也・近藤明彦 (以上体育研究所)

教員はクラスの「熟達雰囲気」を高められているか?

大学における体育担当教員は、履修者が更なる運動やスポーツ活動に参加したくなるような働きかけができていないのか。もしかしたら教員の指導は、履修者の運動やスポーツ活動への参加を、体育授業で途切れさせていないか。本班は、上記の課題に対してFD (Faculty Development: 教員の資質向上) 実践としての体育授業プログラムの在り方として、近年、体育心理学分野において注目されている動機づけ雰囲気理論を用いて教員の指導方法の改善を目指す。

大学における教養としての体育では、何を習得することが期待されているのか。様々なことが期待されるが、そのひとつとして「運動やスポーツ活動を継続する態度」があるだろう。運動やスポーツ活動の減少は、体力の低下や健康度の悪化に関連している。さらには、メンタルヘルスの悪化やコミュニケーション力の低下にも関連しており、生涯に渡って運動やスポーツ活動を継続することは、質の高い生活の基盤を支える重要な要因と考えられる。運動やスポーツ活動の重要性が示される中で大学における教養としての体育は、履修者が教育機関において受ける最後の体育授業となる可能性が高く、運動やスポーツ活動を継続する態度を養う最後の機会なのかもしれない。また、単なる運動やスポーツ活動の実践の場に留まらず、最新の研究による知見やスポーツの文化を知ることができるなど、「知」を獲得する場としても重要な役割を持っていることは明白であろう。

運動やスポーツ活動の参加・継続には、運動やスポーツに対する内発的な動機づけが良い影響を与えることが示されている。運動やスポーツに対する内発的な動機づけとは、運動やスポーツ活動を「医者が薦めるから」や「健康のため」といった他の目的を達成するためではなく、「運動がしたい」や「スポーツが楽しい」などといったそれ自

体を目的とすることである。この内発的な動機づけには、運動やスポーツ実施中の目標を「上達すること」や「新しいスキルを獲得すること」とし、努力することを評価することが良い影響をもたらすことが示されている。これらは熟達目標と呼ばれる。また、ともに運動やスポーツをする仲間が熟達目標を共有すること、すなわち集団が熟達雰囲気を持つことによって、内発的な動機づけが高まることが示されている。そのため、体育において履修者を更なる運動やスポーツ活動へ促すためには、授業の雰囲気を熟達雰囲気にするのが有効である。これらは、「動機づけ雰囲気理論」と呼ばれる。この動機づけ雰囲気について強調したい点は、熟達雰囲気は教員が熟達目標を強調することによって作り出すことが可能であり、教員が果たす役割が大きいことである。先行研究では教員の意図的な指導によって生徒が感じる雰囲気が変化し、動機づけに影響を与えることを示されている。これまでのFDは、履修者にどのような変容がみられたかといった点が注目されていたが、教員がどのような指導を行っているかについては注目されてこなかった。本班は、教員の指導方法に着目し、より良い授業を目指した改善法を検討していく。

体育授業における動機づけ雰囲気研究は、中学・高等学校における検討が主となり、大学体育においては皆無である。そのため、本研究プロジェクトは、動機づけ雰囲気を測る尺度の作成から開始し、現状の体育授業の検討を踏まえ、授業を熟達雰囲気とする指導方法・内容の考案を目指す。そして、履修者の運動やスポーツ活動に対して内発的な動機づけを高め、継続的な参加ができるような働きかけをしていく。

学生スポーツの行動と大学におけるスポーツ

「一般学生の体力・運動能力に関する測定データを管理分析するシステム構築」

班長：石手 靖

班員：山内 賢・吉田泰将・須田芳正・加藤幸司・鳥海 崇・坂井利彰（以上体育研究所）

塾生の体力把握によるスポーツ振興策を探る！

本グループの研究課題は大きく分けて3つに分類できる。

1つめは体力測定の実施結果の活用に関する産学連携プロジェクトである。本塾には約3万人弱の学生がおり、毎年健康診断を実施しているため、塾生の健康状態についてはほぼ把握できているものの、現在体力測定は実施しておらず、学生の体力レベルの把握および他大学の学生らのそれとの比較などは近年実施されていない。そのため塾生の健康状態を議論する際、医学的な面においてのみの議論であり、体育学的な面についての議論が出来ていないことが、本塾における現状の課題である。そこで本グループでは塾生の体力測定を実施し、その結果の把握と結果を活用して塾生の生活の質向上に寄与するべく対応していくことを目的とする。

具体的には体育実技授業内やイベント時に体力測定を実施し、これを基礎データとする。この基礎データを毎年集めるとともに年ごとの回収データ数を増やすことで塾生の体力レベルを議論するうえで極めて貴重なデータとなる。得られたデータは産学連携の下に管理・分析することでの活用を想定している。具体的にはスポーツメーカーとの共同研究あるいは委託研究を想定している。すでに平成25年度においてはアディダス社との共同研究として体育会サッカー部および庭球部においてそれぞれの試合における走量を測定した。また、平成26年度においては日吉キャンパス新入生歓迎イベントとして体力測定イベントの実施を予定しており、システムデザインマネジメント研究科との共同イベントの開催も予定している。

2つめは体力測定に関連したタレント発掘プロジェクトであり、体力測定データを活用することで「塾生へのタレント発掘プログラム」の確立を目指す。慶應義塾には毎年約7000人弱の新入生が入学し、様々な体育会、運動

系サークルに所属している、しかし、その誰もがスポーツをする上で重要な自身の身体的特徴を把握することなく、スポーツ種目を選択しているのが現状である。そこで前述の体力測定と関連して新入生の身体的特徴を測定し、その新入生が有する身体資源を最大限発揮できるスポーツ種目を提案するということを検討している。また、体育会、スポーツ系サークルの側でも各スポーツ種目に適した人材を受け入れ適切に指導・育成していくために必要な指導者の養成を目的として専門知識・経験を有する講師を招聘しての講習会を実施し、またそれぞれの体育会、スポーツ系サークルの指導者から回収する現場からのフィードバックを蓄積することで慶應義塾独自のコーチングモデルの確立を目指す。

3つめは新たなスポーツ文化の醸成である。大学のスポーツ組織においてはあまり考慮されてこなかったが、近年の競技会においては勝敗の決め手となりうる分野である情報戦略、ゲーム分析についても専用のPCソフトの購入と専門スタッフによる講習会を実施する。これらは体育会、スポーツ系サークルの競技力向上に資するのはもちろんであるが、それ以外にもスポーツの役割である「みる」・「する」・「ささえる」のうちの「みる」スポーツの能力向上に寄与し、これは6年後に開催される東京五輪でのスポーツ観戦をより有意義にするものと考えられる。

大学体育の教育理念とカリキュラム

「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」

班長：村山光義

班員：植田史生・奥山静代（以上体育研究所）・佐藤正伸（文教大学）

今再び体育の理念を構築する時

——大学の体育とは？ 体育とスポーツの関係とは？

本研究班のねらいは、現在、様々に語られている大学教育を取り巻く課題を系統的にまとめ、大学体育への課題として検証するとともに、慶應義塾の実情との関係にも考察を加え、今後の諸策を検討することである。

現在の大学に関わる諸問題について考える時、大きく以下の3つのポイントが見えてくる。まず第1に大学質保障・大学認証基準（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）への取り組みとその評価等、大学教育に対する社会的要請が高まっている。これに対し、大学体育分野においては、「体育・スポーツ系大学学長会議」が2011年に「体育スポーツ学分野における教育の質保証——参照基準と教育関連調査結果——」を提示している。

また「公益社団法人全国大学体育連合・関連団体の提言2010」といった大学体育の教育内容の検討およびその実践の必要性も全国的に投げかけられている。こうした大学教育の大きな流れに「体育・スポーツ」という教育がどのように機能し貢献すべきかが問われている。

第2にそうした社会的事情に対して、学内・大学内に目を向ければ、学生を取り巻く課題も重要なポイントとなる。学生の心身の健康保持増進、キャンパスライフの充実としていかに大学が機能できるかも大きな課題である。キャンパスの学生相談室を訪れる学生の増加が、その根の深さを物語っている。大学においてうまく仲間作りができなかったり、キャンパスに居場所のない学生、学業と就職活動に悩む学生等、多様な問題を今の学生は抱えている。単に学術的枠組みのみでカリキュラムが構成され、質の高い学生を社会に送り出せるか？ 初年次教育としてのプログラム、カリキュラム内の具体的枠組み等、検討すべきことがあり、「体育」の持つ教育的効果に期待される部分があることも事実である。我々はここで、もう一度「体育」

とは何か、を問い直し、学生と向き合うことが課題である。

最後に、「スポーツ」を取り巻く社会的事情の変化に目を向ける必要がある。2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることが決定した。スポーツ基本法・基本計画への対応や地域総合型スポーツクラブとの関係の模索等、大学を拠点としたスポーツ振興も社会的貢献として求められているところである。しかし、競技力向上と国民のスポーツ活動の推進が謳われるスポーツ政策に対し、大学において主役である大学生に伝えていく事は何であろうか？ オリンピック精神とはメダルを取ることでなく、スポーツを通じて平和な社会を築ける人間を拡大することである。社会において国民がその精神に基づき東京開催を支える方法は多様である。ボランティアにならずとも、自らがスポーツを実践し、スポーツ文化を享受・伝承することも重要である。この意味においても、スポーツの精神と実践を伝えられる「体育」というカリキュラムを軸に、キャンパス内にどのような体育・スポーツ教育を展開すべきか、学術・科学的専門家集団として体育研究所に課せられた責任は重いと考えられる。

我が班は上記のポイントを念頭に、他の研究班のベースともなりうる理念的な指針を模索し、提示することを目指している。そのため、まず関連文献・書籍の洗い出し、文献レビューから課題の分類、細部のテーマ抽出を行うこととした。上記に基づき、①大学という視点（社会情勢とグローバル化・大学比較（日本と海外の大学）・歴史的变化）、②体育という視点（大学体育の課題・体育とは何か）、③スポーツという視点（スポーツの課題）においてその範囲を把握することを進行中である。その上で、塾における課題とを照らし合わせ、体育研究所の課題解決指針を検討する。

本基盤研究立ち上げから、平成 25 年度までにレビューした文献・書籍については文末に示すが、その内、所内における中間報告において“大学とグローバル化”に関する解説をレビューした。以下にその概要を抜粋しておく。

現在の大学においては、グローバル化による商品化・標準化・評価といった大学の変容の経緯と現状を踏まえながら、短期的視野を長期的視野に拡大する必要がある。大学を現在の価値のみで評価してはならず、大学の固有の機能は、次世代の育成、次世代への学問の継承であることを考慮すべきである。また、グローバル化は現実であると同時にイデオロギーでもある。そこで、旧来の望ましい大学像と新米のネオリベラルなそれとの対立が生じている。古い理念を鍛え直し、別のグローバル化の可能性、マス化ユニバーサル化の学生の変化への配慮等への課題解決をする新しい理念哲学を作り出さねばならない。

(文献リスト：1)

体育においても古い理念を振り返り、現代に生きる新たな哲学が求められている。今後は、こうした文献レビューを深めながら、新たな体育・スポーツを探るとともに、内外の研究者とのシンポジウム・討論などを加え、さらに検討を進める予定である。

文献 (順不同)

- 1) 吉田 文 (2013) グローバリゼーションと大学：広田照幸他編, 日本の大学とグローバル化, 社会変動と大学, 岩波書店.
- 2) 広田照幸 (2013) 日本の大学とグローバル化：広田照幸他編, 日本の大学とグローバル化, 社会変動と大学, 岩波書店.
- 3) 松繁寿和 (2013) グローバル化による競争環境の変化と求められる人材：広田照幸他編, 日本の大学とグローバル化, 社会変動と大学, 岩波書店.
- 4) 小林勝法 (2010) 大学教育の質保証と大学体育の課題, 体育の科学, 60(8),581-585.
- 5) 小林勝法, 山口一美 (2012) 大学教養体育のFDプログラムの体系化, 教育研究所紀要, (21),81-88.
- 6) 杉山 進 (2009) 大学体育の教養について, 体育・スポーツ哲学研究, 31(2),87-93.
- 7) 伴 義孝 (1996) 体育とは何か ——大学改革論議からの発信——, 関西大学出版部.
- 8) 苅谷剛彦 (2012) グローバル化時代の大学論①：アメリカの大学・ニッポンの大学, 中央公論新書.
- 9) 苅谷剛彦 (2012) グローバル化時代の大学論②：イギリスの大学・ニッポンの大学 カレッジ, チュートリアル, エリート教育, 中央公論新書.
- 10) 苅谷剛彦 (2013) 高等教育システムの階層性 ——ニッポンの大学の謎 (エニグマ)：広田照幸他編, 大衆化する大学 ——学生の多様化をどうみるか——, 岩波書店.
- 11) 須藤敏昭 (2012) 大学教育改革と授業研究 ——大学教育実践の「現場」から, 東信堂.
- 12) 前田明洋 (2013) ナレッジ・コモンズ ——グローバル人材を育むキャンパス空間——, 日経 BP 社.
- 13) アラン・プリנקリ他, 小原芳明・監訳 (2005) シカゴ大学教授法ハンドブック (The Chicago Handbook for Teachers) 玉川大学出版部.



体育研究所外部の研究者との討論をめざした講演会の様子 (筑波大学・齋藤氏、関氏) (講演タイトルは P8 参照)

論文

- 1) 野口和行, 須田芳正, 村松 憲, 村山光義, 加藤大仁 (2013) 学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 52(1),11-20.
- 2) 村山光義, 加藤大仁, 須田芳正, 村松 憲, 野口和行 (2013) 体育実技履修学生の社会的スキル及び自己効力感の水準に関する基礎的検討, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 52(1),21-31.
- 3) 村山光義, 近藤明彦 (2014) 特別寄稿: 体育研究所基盤研究のスタートに際して —— 「大学体育研究」の新たな視座を求めて ——, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 53(1),15-23.

学会発表

- 1) 村山光義, 加藤大仁, 須田芳正, 村松 憲, 野口和行 (2012) 体育実技履修学生の自己効力感および社会的スキルの変化に関する基礎的検討 (その2), 第63回日本体育学会, 東海大学, 予稿集 P127.
- 2) 東海林祐子, 永野智久, 加藤貴昭, 村山光義, 野口和行, 村松 憲 (2014) 大学体育における必修授業と選択授業の比較から見たライフスキル獲得の実態の検討, 第2回大学体育研究フォーラム, 抄録集 P15.
- 3) 村山光義, 村松 憲, 野口和行, 東海林祐子 (2014) 大学体育実技が学生の自己効力感・社会的スキルに及ぼす効果について, 第2回大学体育研究フォーラム, 抄録集 P17.

講演会 (兼所内研究会)

- 平成24年11月27日
“体育・スポーツ学分野における教育の質保証について (全国体育系大学学長・学部長会策定)” 演者: 佐藤正伸氏 (文教大学)
- 平成24年12月25日
“体育授業で獲得が期待されるライフスキルの効果と課題について” 演者: 東海林祐子氏 (慶應義塾大学環境情報学部)
- 平成25年1月29日
“体育授業におけるライフスキルトレーニングの活用法に関する検討” 演者: 布施 努氏 (慶應義塾大学スポーツ医学研究センター)
- 平成25年11月26日
“データ分析における、スポーツの社会貢献と可能性” 演者: 馬淵浩幸氏 (CLIMB Factory)
- 平成26年1月31日
“大学における学生選手の学業基準” 演者: 斎藤健司 (筑波大学)・関允淑 (筑波大学大学院博士前期課程体育学専攻)

編集後記 体育研究所設立50周年を経て、全所的な取り組みとしての基盤研究が立ちあがりました。所員はそれぞれ大きく3つの研究課題に分かれ、各研究グループで課題に取り組んでおります。まだ立ち上がってから1年ほどであり、それぞれの課題の端緒についたという現状ではありますが、全所的な取り組みということでこのように書面として残すことになりました。このような機会をきっかけに日吉キャンパスを中心とした塾内関係者の皆様との交流が生まれればと考えております。皆様には是非とも本紙をご一読頂き、体育研究所の研究面についてお気づきの点などございましたらご助言いただければ幸いです。今後の体育研究所の新たな活力とさせていただきます。

これら基盤研究の推進をサポートするのが我々、体育研究所研究委員会になります。委員は所員の研究推進のサポートの他、毎月実施している所内研究会の運営等を担当しております。所内研究会は所員による研究成果の発表の他、外部から講師を招聘する講演会形式のものもあります。24年度は3件、25年度は2件の講演会がありました。いずれも体育を中心とした話題ではありますが、「大学の質保証」などといった大学で教育に携わる方々にも少なからず関係のある内容でございます。講演会に限らず所内研究会にはこれまでも所外の方々にご参集いただいておりますが、より多くの皆様にも足をお運びいただけますようお願い申し上げます。

来年度の本紙では各研究課題から研究成果が出てまいります。研究分野で生まれた成果を実践に移すことで初めて基盤研究、ひいては体育研究所の役割を果たすこととなります。体育科目の授業内容やキャンパス内におけるスポーツイベント等についても変化が生じてくることでしょう。これらについても広く皆様にご参集いただき、ご意見賜ることでよりよい体育研究所としてまいりますので今後ともよろしくようお願い申し上げます。
(鳥海 崇・奥山静代)

慶應義塾大学体育研究所 平成25年度基盤研究レポート

発行日 平成26年3月31日

慶應義塾大学体育研究所 Institute of Physical Education, Keio University

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL:045-566-1068 FAX:045-566-1089 <http://ipe.hc.keio.ac.jp/>